

自分の人生如何に、境涯を改革していくことが出来るのであろうか。日蓮大聖人は、地位や財産や年令、肩書を抜きにして、人間の最終的なその生命の価値は、その人が如何なる法を持ち、如何なる師を持ち、如何なる法を修し、如何に生きて、如何に品格を磨いたかと言う事によって決まると教えられています。

佛はどの様に境涯を高めるのか

私達は大聖人様の教えを信じています。ならばその佛様の御内証を拝することが大事であります。

日蓮大聖人は御自身の御出生について、『開目抄』に（新編五三八）

「末代に入つて二百余年、辺土に生をうく、其の上下賤げせん、其の上貧道ひんどうの身なり」と仰せられ、『佐渡御書』には、（新編五八〇）

「日蓮今生に貧窮下賤ひんぐげせんの者と生まれ旃陀羅せんだらが家より出でたり」と記されている通り、御身は民の子、最下の賤民の家に生れられた事をお示しであります。

そこには和光同塵の大慈悲を示され、身命を捨てて三類の強敵を凌しのがれつつ下種結縁の大益を下されんがため、また法の妙能を顕さんが為の謂いわれの存する事は、日寛上人の御教示に明らかであります。

しかるに、その大聖人が文永八年九月十二日の発迹顕本以後、『撰時抄』に、

「欽明より当帝にいたるまで七百余年、いまだきかず、いまだ見ず。南無妙法蓮華經と唱えよと他人をすすめ我と唱えたる智人なし」（新編八六三）

と言われ、

「日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あえて疑ひなし。これをもってすいせよ漢土月

支にも一閻浮提の内にも肩をならぶる者は有るべからず」と仰せになっておられます。

また更に、

「日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり」（別当御房御返事 新編七二九）

「日蓮は一閻浮提第一の聖人なり」（聖人知三世事 新編七四八）と宣言せられて

おります。

この大轉換の所以は何かと申しますと、それは『佐渡御書』にお示しの如く、「御身は凡夫、御身は人身似て畜身ちくしん」なりとも、その心、その「御内証の尊貴」「御内証の尊極」に依るのであります。

日寛上人はこの大聖人の「御内証の尊貴」について、『開目抄愚記』に、

一には未萌を知り、三世の流転を知見遊ばす智慧の尊貴。

二には「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華經は万年の外・未来までもながるべし」との

慈悲の尊貴。（報恩抄 新編一〇三六）

三には一心欲見仏不自惜身命の誓願、「我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ」（開目抄 新編五七二）との三大誓願、そして一天広布の大誓願等々の誓願の尊貴。

四に俗衆増上慢、道門増上慢、僭聖増上慢等の三類の強敵をことごとく道破どうはし、しのがれた修行の尊貴、行者の尊極。

五には「至理は名無し聖人理を觀じて万物に名を付くる時、因果俱時、不思議の一法之れ有り、之を名けて妙法蓮華と為す」（当体義抄 新編六九五） 未だかつて如何なる仏も、如何なる人師も開顯し得なかつた久遠元初の開顯、つまり本地の尊貴。

六には「日蓮天上天下一切衆生の主君なり父母なり師匠なり」（産湯相承 新編一七一〇）と明言された主師親三徳の尊貴。

この六つの御内証の尊貴、尊極の故に、大聖人は御自ら「一閻浮提第一の聖人」、「大聖人」と仰せられ、私達はまたその通りに拝承はいしやう申し上げるのであります。

大聖人は『聖人知三世事』に、（新編七四九）

「我が弟子仰いで之を見よ此れ偏に日蓮が尊貴なるに非ず法華經の御力の殊勝なるに依るなり」と仰せ遊ばされておられます。

同様にこの大聖人の「一閻浮提第一」の正法を信受し、行ずる者には行ずる者の値打と福德が自ら備わつて来るのです。

大聖人は『持妙法華問答抄』に（新編二九七）

「持つ処の御經の諸經に勝れてましませば能く持つ人も亦諸人にまされり」

「されば持たるる法だに第一ならば持つ人随つて第一なるべし」（新編二九八）と、私達をも称賛しょうさん下さっております。

逆説的に申し上げますならば、『御義口伝』に、

「十界の心性は所持の法なり」（新編一八〇八）

「十界の衆生の心性は所持の經の体なり」（新編一八一〇）と仰せ遊ばされる如く、地位や財産や年令、肩書を抜きにして、自分の境涯を高めるには、その人が如何なる法を持ち、如何なる師を持ち、如何に品格を磨きつつ、如何なる法を修し、如何に生きるかという事によって己の境涯を高める事が出来るのであります。

「法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に所尊し」（南条殿御返事新編一五六九）との御文を心に抱いて、どうか「一閻浮提第一の法を行ずる者こそ第一の人なり」との確信を持って、大聖人の弟子らしく、信徒らしく師子王の氣概のもとに、悔いない人生を生きて頂きたいと、願うのであります。

幸いな事に、この「時」というものは、どのような家庭に生まれようとも、どんなに貧しい人でも裕福な境涯の人にも、皆等しく平等に与えられております。しかもまた、どんな人の命にも過去と現在と未来という、三世の時というものがあります。その中であつて私達は過去をどうすることも出来ません。遠き未来はまた予測する事は出来ませんし、手が届きません。此の三世の中で、自らの信心によって、自らの存念で改革出来るのは、まさに現在だけであり、今しかないのです。

そう思うと今日の発心が如何に大事であるかという事がわかりでしょう。どうか、一人一人が新たな出発を開始して下さる事を期待しております。